

[迫り来る法改正の荒波－30：ファーイースト方式・金融のサビ落とし]

<序文>時代を区切る－そこには、何らかの象徴的な出来事や事件、天変地異など、大抵は後世の人間が理解し易く、腑に落ち易い、その前後で色合いが異なる不連続線＝断層帯＝が存在している－これまで私達は、そう受け止めて来た様に思います。けれども、時にはそれが、意図的・人為的に施される場合もあるのではないか…確かに時の流れには、隣人同士の反目や領土・領海の支配権争いを招く物理的境界線のような、紛争の種となる目盛りや仕切り線こそありませんが、それでも敗者や死者にとって「歴史」は存在しないも同然、と云われるように、不都合な真実は闇に葬られているのかも知れない…敢えて隠蔽する必要もない程、話題にすらならず、世間の移り気や無関心という村八分の只中に晒されて、存在自体忘れ去られているのかも知れない…或いは、日々の生活に追われる者からすれば、為政者（勝者）がどう都合よく教科書の文言をこねくり回し、その事実から関心を反らそうと試みようがみまいが、そんな事より、明日の暮らし向きの方が何より大切なのかも知れない…等々、色々と疑念が生じて参ります。

例えば、1868年を以て始まりとされる「明治」はどうだったのでしょうか？会津落城2週間前の同年10月23日に慶応から明治に改元されている為、教科書的には間違っている訳ではありません。がこのとき、実際には未だ内乱（戊辰戦争～1869）は終結しておらず、徳川幕藩体制＝連邦制＝に代わって明治政府＝中央集権体制＝が成立したとは到底言えない状態でした。つまり、薩長中心の討幕（クーデター）派が人心収攬の為「改元」を利用した、これこそ正に意図的、政治的な時代区分の典型ではなかったかと思われまます。実際、官軍と称しながら実態は、薩長と土佐の寄せ集めの藩兵で、しかも会津攻めの際には土佐兵は参戦せず、残った薩長の兵隊が僅か400名（内350名が戦死）という有様。東征軍に帰順した東北諸藩の支援がなければ、勝敗の帰趨はどうなったか、この時点では判らなかつたのです。そんな状況下で土佐は何故、会津戦争に兵士を送らなかつたのか－その大きな理由の一つが藩の財政問題でした。武器弾薬や食料をはじめ、所謂軍費は全て各藩の負担。カネ（経済）が回らなければ、戦どころではなく、官軍主力の薩長ですら僅か400名しか派兵できなかつたのです。そして生き残った兵も帰郷と共に、各藩の藩兵という立場に戻ってしまいました。戊辰戦争が終わったとき、政府軍に属する兵士は一名もおらず、政府軍（後に薩摩兵がベースの近衛兵＝御親兵がその始まり）自体も存在しなかつたのです。

明治維新へと歴史の舞台を回したのは、これ程危うい、不安定なパワーだったのかと驚かされますが、その基軸を始動させたのは、紛れもなく様々な圧力を撥ね退けようとする個人の大胆な決断と行動であり、現代にも十分通用するテーマと云えます。本稿では、金融を通して、その辺りを探って見ようと思います。